

読書感想文コンクール結果発表

第四回読書感想文コンクール入賞作品

最優秀賞 『桐島、部活やめるってよ』【朝井リョウ 著】
(館長賞) 看護学部3年 宮崎 雅子さん

優秀賞 『図解でわかる! ディズニー感動のサービス』【小松田勝 著】
博士課程2年 高橋 信博さん

優秀賞 『富の福音』【カーネギー・アンドリュー 著】
保健医療学部2年 人見 俊輔さん

優秀賞 『死を超えて-「生き方上手」の言葉、150』【日野原重明 著】
鍼灸学部3年 南 大智さん

第四回読書感想文コンクール応募者

中川知彦・原田涼平・堀 優貴・藤松真矢
中尾麗花・井田佑二郎・久枝綺乃・河野将也
高野倅希・高田真弓子・小針亜九・不破 智
月森大介・浅草大将・松本正暉

最優秀賞（図書館長賞）

『桐島、部活やめるってよ』

朝井リョウ 著
集英社

看護学部3年 宮崎雅子

「高校という狭い社会でもがく17歳のリアル」と、丁寧な文字で書かれた図書館のポップを見て私はこの本を選んだ。私が17歳の頃を振り返ってみると、部活、友達、恋愛などいわゆる青春と呼ばれるような経験もしてきた。しかし、高校生というのはそんな綺麗なものだけではない。良くも悪くも目立つ上位グループとどちらかといえば地味で静かな下位グループとに勝手に格付けされたり、一人になるのが怖くて嫌なことも言えずに友達にあわせたり、クラスメイトと比較して劣等感を感じたり、誰もがみんな多かれ少なかれ心に闇を抱えている。この本にはそんな17歳の感情がリアルに描かれていた。

この本のタイトルにもなっている桐島は、最後まで登場することはなかった。登場人物の間で語られる桐島は、バレーボール部のキャプテンであり、クラスでも人気があるいわゆる「上位グループの中心」の人。そんな彼が部活をやめるということで、毎日彼の部活が終わるのを待っていた友人、その友人に好意を抱く女子生徒、部活仲間などさまざまな人に徐々に変化があらわれてくる。たった1人が部活をやめることでそんなに周りに影響があるものなのだろうか、と私は本を読み始めたときに感じた。しかし、本に登場する人々はみんな桐島という1人の人物を中心に置き自分を確立しているのだと読み進めていくうちに分かった。

私がこの本の中で一番共感できたのは、桐島の友人でいつもバスケットボールをしながら彼の部活が終わるのを待っていた菊池宏樹の話である。彼は野球部のエース的存在であったが、部活をサボるようになり、いつしか幽霊部員になってしまっていた。何かを本気でやって何もできない自分を知ることが一番怖かったからだ。そして何が本当にやりたいことなのか宏樹は分からなくなっていた。「俺たちはまだ17歳で、これからなんでもやりたいことができる、希望も夢もなんでも持っている、なんて言われるけど本当は違う。これからなんでも手に入れられる可能性のあるてのひらがあるってだけで、今は空っぽなんだ」という言葉が宏樹の話の中にあっただ。17歳のときの私もそうだった。子どものときから将来の夢はたくさんあって、しかし、大学受験を控えたときはじめてその夢を1つにしぼらなければならないと思った。選んだ道は看護師だったが、

本当にそれでいいのかももっとやりたいことがあるんじゃないかと宏樹と同じように悩んだことを覚えている。17歳の宏樹と私は似ていると感じた。

しかし宏樹と私には違いがあった。この本の最後には、宏樹は今まで逃げ続けてきた野球部に戻る決断をする。宏樹は、桐島が部活をやめたことではじめはショックをうけたものの、周りが動揺している中で自分を見つめ直していた。クラスの中で下位グループと位置づけられている人が「ダサイ」と周りに言われているのを見ても本当にかっこわるいのは立ち向かうことも逃げることもできない自分なのではないかと考えていた。変わりたい、今のかっこわるい自分から抜けだしたい。そう思って宏樹は最終的に野球部に戻っていくのである。

一方、私の方は21歳になった今でも17歳の頃と同じように悩んでいる。看護師になるために勉強している今でも、「自分は看護師にむいていないのではないかと不安におそわれ、逃げ出したいくなることが多々ある。私はまだ本当に看護師になりたいのか、看護師になれたとしてやりがいを見つけて仕事ができるのか、と手探り状態のままである。そこが私と宏樹の違いである。

私は、まだ看護師になるための勉強に必死になれていないのではないかとこの本を読んだ今、自分の生活を振り返ってみて感じた。もちろん試験期間になると受かりたいと思って机に向かうが、それ以外で国家試験にむけて勉強しようとか実習にむけての準備をしようとか、やるべきことは明確であるのに行動にうつせないでいる。でも、このままでは将来胸を張って「看護師です！」とは言えない。まずは、目の前の実習を乗り切るために、今できる努力を今するべきである。看護師という仕事をもっと積極的に追い求められるようになるために、自分を変える努力をするべきである。宏樹のように何か目標に向かって行動できる人はかっこいい人だと見ていて感じる。私も看護師になるという目標に向かってもっと必死になりたい。

所蔵図書館 南丹市立図書館

優秀賞

『図解でわかる！ ディズニー 感動のサービス』

小松田 勝 著

大学院博士課程2年 高橋信博

1983年に東京ディズニーランドが開園して約30年。幅広い年齢層に支持されて続けている同施設は、テーマパークとしての評判もさることながら、リピーター率90%とも言われる驚異的な人気の高さで優秀な企業としても非常に評価されている。バブル崩壊後にも好業績を維持して来たというディズニーの人気の秘密は何だろうか？この本の最後の小節にその答えが端的に書かれている。「企業が成長し、業績を拡大させていくための最大のポイントは、何といても、そこで働く従業員の質を高めることにほかなりません。」このことは、この本の中で繰り返し書かれている。「来場者とのコミュニケーションを高いレベルで続けられる従業員」の存在があるからこそ、ディズニーが単なるテーマパークではなく、来場者の期待を超えた「感動」を生む場所になるというのである。

私もこの施設を何度か訪れた事がある。その時に、働いている人たちに関して印象に残ったのは「若い」と「笑顔」であることの2つだった。「若い」と感じるのは当然で、ここの現場スタッフは開園当初から9割が学生のアルバイトである。彼らは年間何万人もが訪れる場所で働き「おもてなしのサービス」を提供し続けることを求められているが、この「おもてなし」という言葉は漠然としていてわかりにくい。そこでディズニーでは、「礼儀正しさ」を意識することから始めさせることで、若い従業員たちにも「おもてなしのサービス」を実行しやすくしているというのである。この「礼儀正しさ」という言葉が、今回この本を読んでいて私の一番のキーワードとなった。礼儀正しさを実践する上で最初に守らなければならないのが「挨拶」であり、しかもそれを「来場者の顔を見て笑顔で」行うというルールになっている。その徹底ぶりは、私に従業員たちの笑顔が印象づけられたことから明らかである。テーマパークという、人が楽しみを求めてやってくる場所で、来てくれた方たちにどのように接したら良いか？その方法は各従業員によって、また来場者の状況によっても違っているはずだが、最低限の決まり事として「礼儀正しさ」というスタンスを設定するのは、とても分かりやすいと思った。「明るい挨拶」および「清潔な身だしなみの徹底」は礼儀としてだけでなく、その先の目標である「おもてなし」にも共通する重要な取り組みである。この2つは自分から率先して実行できるため、最初に意識させることで従業員のコミュニケーション能力を上げるきっかけになるのだろう。私自身も普段の生活の中で「礼儀正しさ」を意識してみ

ようと考えている。

さらにディズニーでは、初期の研修で教育された従業員たちのモチベーションを保つため、比較的短い契約期間の設定や、スタッフ同士がお互いの良い仕事を褒め合うようなシステム、注意や叱ることよりも褒めたりフォローしたりすることを基本とした教育スタンスなどの工夫もされている。このような環境で働いている従業員たちの仕事ぶりは多くの感謝の手紙として帰って来ている。本の中で紹介されていた手紙の中には思わず感動してしまうものもあり、スタッフたちはディズニーの一員であることに本当に誇りをもっているのだと感じた。そこでふと気になったのが、そんな彼らの日常である。ディズニーのスタッフとして笑顔で働いている学生たちは、普段の生活ではどのように過ごしているのだろうか？この本にそんなことまでは書かれていない。しかし著者が自身の考えとして、「おもてなし」の本質は、サービス技術ではなく自分の「良心」が表現されたものであり、それは職場だけでなく日常生活でも求められるものであると記している。このことから、少なくとも著者は、スタッフに対して普段からおもてなしの精神を持つ人であること望んでいると考えられた。私も著者の考えに賛同している。仕事と全く同じである必要はないが、職場の制服を着た時だけしか笑顔にならない人が、人を感動させるような礼儀正しさやおもてなしを表現できるとは思えない。そういったものは普段の生活で染み付き、自然と出せるようになってこそ誰かに響くのだと思う。

この本全体を通して考えたのは、他人と接する時の自分のあり方、コミュニケーションの取り方についてだった。この本の一文に、コミュニケーションの本質は「相手を認めること」であり、このスタンスが「相手の良いところを引き出していく」と書かれていた。私は鍼灸師の免許を取ったことで治療者として誰かを癒す資格を得た。現在は大学院で学んでおり、将来は教育をする環境も選べるようになる。どちらの場面でも、相手の良いところを引き出すことが仕事なので、まずは相手を認めることを心がけたい。もちろん治療や教育は「夢と魔法の国」での仕事ではないため、テーマパークでの接客とは違うことも多い。例えば人と関わるのも、ディズニーでは来場者と従業員という形で特別な日を共有するが、私の場合はより日常的な空間で患者さんや学生たちと時間を過ごすはずである。また楽しい時間を過ごすテーマパークとは異なり、患者さんの健康や学生の将来のために、時として私には「厳しさ」が求められるだろう。注意したり叱ったりすることもあると思うが、そんな時にも、一時の感情ではなく、相手の良いところを引き出せるように、相手に必要なことを考えた上で行動できるようになりたい。そのためにも普段の関係が大事になると考えているので、「礼儀正しさ」をキーワードに、人とひとのつながりを大切にしながら過ごして行こうと思う。

優秀賞

『富の福音』

カーネギー・アンドリュー 著

保健医療学部2年 人見俊輔

この大学に入学して1年が過ぎた。その1年間「週5日の授業、それが終わると部活動、部活動がない日はアルバイト」という日々を繰り返してきた中で得たものはとても大きかった。部活動では、全国から集まった個性豊かな仲間ができ、その仲間と共に春季・秋季リーグ連覇を成し遂げた。また学業面での私の成績や努力を見て、本大学のある教授から、自身の経営されている接骨院での医療補助に誘っていただいた。そこでの仕事を通して「患者を第一に考える」という理念や、尊敬する先生方のサポートができる嬉しさを実感した。そして何よりも、「教師になるか医療人になるか」と悩みながら本学に入学した私にとって「医療人を目指す」という自分の夢を定められたことが一番大きかった。

夢が決まると自分に足りないものが見えてきた。中でも深刻な問題は金銭面であった。最終的な私自身の理想像が海外ボランティアの医療人だからである。ボランティアとは無償で行うことを言い、活動の為に必要な経費は自分で賄わなければならない。それが海外となればさらに負担は増える。私は夢と現実の間でもどかしい気持ちになっていった。「今の内からコツコツ貯金をしよう」と思っても、学生で、更に部活動にも参加している私は、貯金できる額も少なく、焦りが募るばかりであった。そんな時、「お金が欲しいなどという願望設定は全くの無意味」という、本の紹介に書かれていたフレーズを見た私は、なにかすがるような気持ちでこの本を選んだ。

「富の福音」。この本は、「鉄鋼王」と呼ばれるアンドリュー・カーネギーが書いたものである。紡績工場で働きはじめた頃から「鉄鋼王」と呼ばれるようになるまでの成長からはじまり、「富豪は奉仕活動をする」という彼の理念を中心に、成功への道のりを書いたものである。

「富を持って死ぬ者は、真に不名誉である」。私がこの本で最初に衝撃を受けた言葉である。なぜならばカーネギーは、富を相続することすらも「富を持って死ぬ者」としたからである。大半の人は自身の貯金（富）を息子や娘に受け渡すことに何の違和感も感じないのではないだろうか。私もその一人で、それが子供のためになり、子供に楽をさせられるという優しさであると考えていた。

しかし、カーネギーはそれが、真に子供のためになることではないと否定した。蓄積された富を受け継ぐということは富を蓄積する困難さを知ることが出来ないと考えているからである。さらに、食べ物に飢えているホームレスに食べ物も恵む行為も愚行であるとした。そのホームレスが恵んでもらえる事を学び、自分で食べ物を得ようとしなくなるからである。「富の相続」や「貧困者への援助」など、社会では正しいと思われがちな事柄を否定したカーネギーに、私は圧倒された。それと同時に多くの人が間違いを正しいと勘違いしているのだという事に恐怖を感じた。私が感じたこの「恐怖」については、最後にもう少し触れたい。つまり「かわいそう」だと思って何かをしてあげる事が、本当に相手のためになるのかどうかを考える事が本当の「慈善行為」であるのだ。そして、「助けるべき人は、自分自身で努力している人に限り、それを見極めることが重要だ」とした。

「何がしたいのか。ではなく、何が出来るのか」。この言葉も私の心を動かした。これは、十二歳のカーネギーが生活費を稼ぐためにたどり着いた言葉であった。カーネギーは初めての給料をもらった時に、「家族や社会のために役に立っているのだ」という自覚を持ち、それが彼自身を成長させるきっかけになったと記している。「何がしたいのか？」と聞かれると私は、「海外ボランティアの医療人になりたい」と答えるが、「何が出来るのか？」と聞かれるとすぐに答える事ができない。今「何が出来るのか」ということを考えられるのかどうか将来を左右する、直感でそう感じた私が絞り出した答えが「あと三年で国家試験に合格する」であった。では「そのために何が出来るのか？」と自分に問いかけ、「今の生活をあと三年間維持する」ことを目標とした。それをやり遂げる事が出来ない限り、私が希望している「海外ボランティア」の仕事にたどり着く事は出来ないだろう。カーネギーはこうも書いている。「夢を持っていた私は、目の前の暮らしだけで一生を終えるつもりはなかった」。私も毎日の生活だけに必死にならずに、常に、「海外ボランティア」という夢を追い続けたい。

このように、この本にはお金の稼ぎ方が詳しく書かれているわけではない。しかし、「君たちが社会の下積みになっているのは、君たちが無能だからだ」という言葉からは、社会は成るべくして成り立っている、という厳しい現実を学んだ。つまり、お金がないことにいくら困っても、それはその人がその収入に見合った分しか世の中に貢献出来ていないということなのだ。「貧困を社会からなくそう」という運動は、正直や勤勉、克己心など、人間社会の美德を生み出す基盤を、根底から破壊する事になりかねない」という言葉からは、富豪が投資先の判断を間違えれば、それは社会の基盤を崩す事になりかねない、ということ学んだ。努力しようとしぬ人への投資は、その人を、ますます墮落させるだけである。そして、私が前半に感じた「恐怖」の根本はこの「投資先の判断」である。「富豪が社会の一般的な考え方で投資をしてしまったら」そう考えたからである。「カーネギーのような思想で投資を慎重に選ぶ富豪が、果たして

どれほどいるのか」。この本を読むまでは、想像もしていなかった、「世の中を良くするための投資をする」という、「富豪の使命」に気付く事ができた。

「富の分配」や「真の慈善行為」など、全てがなるべくして成り立っている。私は、夢すら決まっていなかったが、変わろうと努力した結果、夢を得る事ができた。私は、「焦らなくても、夢に向かって努力していれば、結果としてボランティアのための資金もえることができるだろう。」と考えるようになった。私は、「お金の稼ぎ方」ではなく、「努力していれば結果はついてくる」という強い信念を学んだ。あとは、迷う事なく進むだけである。「進むか、退くか、常に二つに一つの道しかない」とカーネギーは述べている。それならば、私は常に夢に向かって進み続ける人間でありたい。

優 秀 賞

『死を超えて-「生きかた上手」の言葉、150』

日野原重明 著

鍼灸学部3年 南 大智

私は高校3年生の4月の時点でこの先どうしていきたいか、どこに就職して、その後何がしたいかなどまだあまり考えたことがありませんでした。私と同じように将来何になりたいか分からずに何となく勉強して、部活をして時間を過ごしている学生も少なくないと思います。私がそのように悩んでいた時に父から薦められた一冊の本がありました。それがこの「生きかた上手」という本です。しかし、はじめはこの本を読む気があまりしませんでした。それというのも、私は小さい頃から文字ばかりがつらつらと書かれている小説を読むのが嫌いで、楽しい、おもしろい、ただそれだけを求めて漫画ばかり読んでいたからです。そんな私がある日、とうとうこの本を読み始めました。なぜ読む気になったのか、漫画ばかりの毎日に変化を与えたかったのかもしれませんが。将来に焦りを感じていたのかもしれませんが。しかし、一番の理由は初めて父から薦められた本がどんな内容なのか少し興味があったからだと思います。

この本は、多くの患者さんと出会い、生と死を目の当たりにしてきた著者の日野原重明さんが人生の生きかたについてを語ったものであり、その口調はとてもやさしく、丁寧で分かりやすいものであったため、すらすらと読み終えることが出来ました。健康に長生きされている方ならではの重みのある言葉の数々や、日野原さんが説いた医療人のありかたは大変興味深く、将来何をしたいかが分からなかった私にとっては刺激的で医療に対する関心を持つきっかけになりました。次第にそれは強いものとなっていき、今では、医療人になるために大学で勉強しています。この本と出会っていなければ、もしかしたら医療の道に進んでいなかったかもしれません、はたまたやりたいことを見つけられず、家に引きこもっていたかもしれません。この本はそんな私に「道」を示してくれた大事な大事な道しるべです。

この本と出会ってから4年が過ぎた今、もう一度読み返してみると、また違った面白さがありました。それというのも、高校生だった私が分からなかったことが今では少し分かるようになり、日野原さんの考えがより理解できるからです。

「治す医療から癒す医療へ」、「医師の目の前にいる人は、病んだ患部ではなく、病んだ人であること」という言葉は全くその通りだと思いました。検査、検査の繰り返しでかえって具合を悪くしてしまう患者さんも多いのではないで

しょうか。検査のデータだけを見て決めつけるのではなく、医師と患者で十分な対話をする事で分かることがあるのではないのでしょうか。今では、患者さんの痛みや苦しみに耳を傾けることで「癒す医療」というものに近づくことができるのだと思っています。

このように、この本には印象的な言葉がいくつも出てきますが、その中で最も印象的だったのが「ありがとうのことばで人生をしめくくる」というものでした。この言葉を目にした時、祖父と過ごした思い出が蘇ってきました。

私が保育園に通っているときから祖父には毎日面倒を見てくれました。遊んでもらったり、耳掃除してもらったり、わがままを聞いてもらったりと大変だっただろうと今では思います。そんな祖父は私が中学2年生の夏、体調を崩して入院し、その一週間後に老衰で亡くなりました。普段から地域の人たちに慕われていた祖父だったので、入院中も毎日のようにお見舞いに来る人が絶えませんでした。祖父はおしゃべりが好きな人だったのでお見舞いに行った時はよくいろいろな話をしました。しかし、入院して5日ほどたった頃からどんどん元気がなくなっていき、言葉も話さなくなり、ほとんど寝たきりの状態になりました。そうしていよいよ最後の日、目もろくに開いていない状態の祖父の手を私が握り続けていると弱い力で握り返してきたのです。そうして私の手を引っ張るので何かを伝えようとしているのかと思い、祖父の口元へと耳を近づけました。すると、かすかな声で、けれども確かに「ありがとう」と言われました。それが祖父の最後の言葉です。

「死」というものはとても悲しいものですが、こうして感謝の言葉を受け渡される事で、残される者の心にも感謝の気持ちが生まれるのだと私は思います。祖父がそうして「ありがとう」という感謝のことばをもって人生の最後を迎えられたことを誇りに思います。この「ありがとうのことばで人生をしめくくる」という言葉を大切にして、自分のいのちが間もなく終わる別れの時に、愛する人達に感謝の言葉を残していける、そんな悔いのない生涯を送る事が私の目標です。